

アメリカのキリスト教原理主義・

福音主義についての一考察

油 井 義 昭

二〇〇一年九月十一日の米国同時多発テロは米国民に大きな衝撃を与え、今もその余波が続いている。二〇〇一年九月十一日におけるアメリカの特色はキリスト教原理主義の復活ということであった。米国のブッシュ大統領はイスラム過激派による米国への攻撃をテロと位置づけ、その徹底的な根絶を宣言し、二〇〇二年最重要容疑者のオサマ・ビンラディン、テロ組織アルカイダに報復攻撃を行ない、アフガニスタンのタリバン政権を崩壊させた。二〇〇三年三月二十日、平和を愛する世界の人々の祈りを無視して、米英は、大量破壊兵器の保有を名目にイラクに侵攻した。米英などがイラクを占領して三年になろうとしている。米英の武力行使の理由は「テロ組織との関連」から「大量破壊兵器の脅威」そして「イラクの民主化」へと変わっていったが、侵略・占領の真の意図は世界第二の石油埋蔵量を持つイラクへの両国の利権になりつつある。侵略・占領の真の意図は「石油資源の確保」であり「親米政権の擁立」である。大量破壊兵器は見つからず、「イラクの民主化」も実現には多くの困難が伴うことだろう。米国はイラクのキリスト教徒の自由のためにも

戦ったはずであるが、イラクの八〇万人のキリスト教徒（全人口の三％に当たる）と教会は、フセイン政権時代にはなかったほどのイスラム教徒によるテロと憎しみの標的にされている。これまでイラクへの派遣米軍兵士のうち二三〇〇人以上の死者を出し、一万人以上が負傷した。イラク人約一〇万人が死亡した。イラク戦争において顕著なことは米国のキリスト教原理主義者と福音派の多くがブッシュ大統領とその政策を支持したということである。どうして米国キリスト教原理主義者並びに福音派はブッシュ大統領とその政策を支持するのだろうか。そのことをこれから見てみよう。

この小論が目的とすることは、アメリカのキリスト教原理主義がどのような宗教運動で、アメリカのキリスト教界のどのような位置にあり、歴史的にアメリカ社会にどのようなインパクトを与えてきたのか、またキリスト教原理主義と密接な関わりのある福音主義はどのような位置にあるのか、「宗教右派」と呼ばれる新宗教右派とどのような関わりがあるのか、現代アメリカの政治にどのような関わりがあるかについて論ずることである。一言で言えば、イギリスやドイツと比べれば、アメリカほどキリスト教的な観念が政治の舞台に現われ、政治家が公言する国はない。それはどうしてなのかということである。^①

Ⅰ. アメリカの建国とキリスト教

1. アメリカの建国と清教徒的キリスト教との関わり

アメリカの全運命はアメリカの海岸に到着した最初の清教徒に含まれていたように思われる。アメリカに最初にやってきた移民の集団として最もよく知られているのは、何といっても巡礼父祖（ピルグリム・ファーザーズ）である。彼らは一六二〇年、メイフラワー号に乗って大西洋を渡り、厳寒の十二月にマサチューセッツ州ボストンの南に位置するプリマスに到着した。アメリカ建国の最初の人たちは、イギリスで清教徒

的な理想社会を実現することに失望し、新大陸にやって来た。彼らは「神に選ばれ民」という強烈な宗教的自己認識（アイデンティティ）があった。かの有名な「メイフラワー盟約」にはこう書かれている。「われらはこの文書により、神の御前にて、神とわれらの間に厳肅なる盟約を交わし、一致団結して市民政治の実をあげ、もって秩序を改善し、自己保存を全うし、上記の目的を促進する……」われわれは、ここに述べられている内容から、清教徒たちが、聖書の神を信じ、神と交わした盟約を基準として道徳的秩序を保ちつつ、植民事業を通じて、神聖な共同体を形成し維持しようとする強靱な意志と共に、選ばれた民としての自己認識を持っていたことを読み取ることが出来る。^③

2. 大覚醒―「荒野」という舞台

後に述べることになるが、アメリカで原理主義を生み出したのは二十世紀初頭の信仰復興運動である。その前にアメリカ史には幾度かの全大陸的と言ってよい大きな信仰復興があった。というよりも、繰り返される信仰復興運動こそ、アメリカ・キリスト教の最も顕著な歴史的特色であったと言うべきかもしれない。

アメリカが最初の全大陸的な信仰復興運動は、独立以前の一七三〇～四〇年代のことであった。この運動は一七二〇年にニュージャージーで始まり、三四年にはニューイングランドを巻き込み、四〇年代前半には植民地全体が、熱狂的な信仰のうねりに吞み込まれた。この信仰復興は十八世紀のイギリスで起こったジョン・ウェスレーとチャールズ・ウェスレーの信仰復興運動とも連携した。この信仰復興運動は、一面ではガリレオやニュートンやロックなどに代表される啓蒙主義や近代的な科学的世界観の興隆に対抗して起こった、環大西洋世界のキリスト教界からの反撃の一部と見ることが出来る。この時、既に、理性や科学に基づく近代的、世俗的な世界観が流布してゆく中で、いかに超自然的な信仰を維持、発展させていくのか、という近代以後今日に至るキリスト教の試練が始まったと言ってよい。

しかし同時に、「大覚醒」は新大陸への入植から一世紀以上を経たアメリカ植民地社会の変化に触発された運動であった。清教徒たちが信仰の純粹性を求めてイギリス国教会から分離して新世界に來た動機はカトリックやプロテスタント教会など、ヨーロッパ・キリスト教界の下における組織信仰の形式化や儀式化、伝統主義の浸透に対する危機感にあった。初期の米国清教徒にとっては移住そのものが、信仰の形式化に対抗したプロテスタント的福音主義の再生、復興をめざす運動であった。そもそもプロテスタントとは、何よりも個々人が自らの体験を通して神の存在を確信し、改めてそれに帰依する「回心」こそが信仰の中心であるという訴えであった。そこでは、形骸化した精緻な神学よりは聖書の簡明直裁なメッセージを頼りに、個々人の心からの祈りを通して、十字架上のキリストの犠牲の意味に目覚めてゆかなければならないことが強調されていた。

そもそもが対抗すべき神学的伝統も信仰組織もなく、専門の聖職者の数も稀なところに、入植者個々の固い信仰心だけを基礎として建てられる以外になかったアメリカのキリスト教界にとって、個人の回心に重きを置く福音主義者こそは、最も適切な信仰のあり方に他ならなかった。自らを旧約聖書の預言者たちに擬した彼らにとって、奢侈や贅沢におぼれたヨーロッパ市民社会は、もはや信仰の場としてふさわしくなく、新世界の無垢な荒野こそが宗教的理想の根付くべき舞台となった。

しかしながら、移住が世俗生活を伴う以上、荒野もまた文明化の危機を免れることはない。世俗生活が豊かさを増し、落ち着いていくにつれ、各地のキリスト教会も発展し、制度的安定を見たが、それはまた同時に信仰の形式化、儀式化の危機の到來をも意味した。この危機を克服し、日々信仰を復興し続けなければ、アメリカのキリスト教もヨーロッパ・キリスト教の徹を踏むことになる。そうならないためには、何よりも広範な個々人の覚醒と回心が求められなければならない。「大覚醒」は、このようなアメリカ固有の社会状態

から発した福音主義的な復興運動でもあった。

大覚醒の中心的説教者イギリス国教会のカルヴァン派ジョージ・ホイットフィールドは、ニューヨーク、フィラデルフィア、チャールストン、サヴァナに至る巡回説教によって、各地で大量の会衆を集め、多くの人を回心に導いた。そして「大覚醒」が、今日のテレビ福音伝道師にまで連なる信仰復興運動の原型を作り上げたことも否定できないであろう。個々の信者に悔い改めと回心を熱烈に説く説教のスタイルとレトリック、それが引き起こす大衆の高揚と熱狂には、初期の野外集会を思い起こさせるものがある^④。

大覚醒がその後のアメリカにもたらした宗教社会的な効果は次の四点にまとめられよう。

第一に、植民地の宗教的多様性を背景に「アメリカ的キリスト教」という共通の信仰形態が生まれた。具体的には、福音主義的、敬虔主義的な方向に信仰が性格づけられていった。しかも、個人の回心体験が重視され、一方で、難解な神学的議論が否定され、教会制度の簡素化が行なわれた。

第二に、こうしたことから、聖職者の権威と機能の低下がもたらされた。そのために、平信徒による説教と伝道という形態が生まれた。

第三に、アメリカの国民を統合する国民主義（ナショナリズム）を醸成した。大覚醒は教派による違いや地域による特徴を超えた運動であり、教会の枠を超えた連帯意識を生み出した。具体的には、市民的千年王国を期待する「神の下の国民」や「丘の上の町」という国家観、国民観が生まれた。

第四に、宗教的寛容と信教の自由に関する明確な認識がもたらされ、国教会樹立の禁止と信教の自由を謳う「独立戦争後の憲法修正第一条を制定するための思想的基礎」が確立した^⑤。

一七七六年、イギリスから独立を勝ち取ったアメリカは、「独立宣言」を出した。独立宣言には宗教的表現

が多い。ジェファアソンとワシントンの心を捉えていた思想は啓蒙主義であった。しかし、指導者達と教会の指導者であった清教徒達は、共同してイギリスと戦った。清教徒的信仰と啓蒙主義、これが独立革命の二つの精神となった。また「アメリカ合衆国憲法」制定の二年後の一七九一年に「権利の章典」が書き加えられ、憲法修正第一条として、政教分離と信教の自由が成文化した。しかし、アメリカの国家と教会との関わりが、政教分離を建前としながらも、色々な意味で関わってゆくことになる。筆者は一九七〇年代初期にアメリカの福音派神学校の一つのアズベリー神学校で学んだ。スタンガー学長（合同メソジスト教会）が米国では「国と教会は分離しているが、離婚はしていない」と発言したが、この言葉の中に国家と教会について的一般市民の心情が見事に表わされていると思った。

3. 共和主義と信仰復興

二度目の信仰復興運動の高まりは、十九世紀前半に起こっている。第一次の信仰復興運動と第二次の間には、ヨーロッパとアメリカで、政治を宗教から切り離す世俗的な国民主義革命が勃発し、工業化と都市化が緒につき、資本主義経済が急成長するといった、いわば啓蒙主義に立脚した近代的国民国家が形成されていた。

国家としてのアメリカ合衆国が形成される際に、政教分離原則が採用された。その理由の一つは当時、アメリカ社会が、多元的な宗教、教派を含み込んでいた、広大な自由地の存在にも助けられて各教派は棲み分けを行ない、独立期までには比較的寛容で多元的な宗教世界が成立していた。このような多元的な教派組織がすべて、一つの世俗政府の下で共存するためには、政教分離原則を立てる以外に選択肢はなかった。

とはいえこの原則の成立が、革命によって成立した新しい共和主義国家と福音主義的なキリスト教との分離を意味したわけではない。独立革命は、むしろ両者を反ヨーロッパ感情で結びつけたと言ってよい。福音

主義的な宗教指導者のほとんどは革命を支持した。彼らにとつと、専制か自由かという善悪二元論を前提とする革命の大義は、反キリストかキリストかという宗教的・二元論の世俗版にほかならず、自由とは世俗的には専制からの自由を、宗教的には、罪からの解放を意味したとされる。説教壇から政治的教説を宗教的レトリックにくるんで発するという、福音伝道師の政治介入のパターンは、この時に確立を見たと言つてよい。

政教分離原則は、一方で教派教会間の信者獲得競争を激化させた。革命後、共和主義が新しい国民社会形成の原理とされ、西部開拓が進行するにつれ、宗教指導者たちは、いかに多数の信者を獲得し、信仰生活を維持させるべきかという課題に直面した。信仰復興運動は、西部の新開地を中心として再び頻繁な熱狂的野外集会と大衆的回心という形を取つて展開された。

この第二次信仰復興運動の特色は、それが現世社会の種々の共和主義的改革運動と結びついた点である。女性選挙権運動、禁酒運動、学校改革、刑務所改革、そしてとりわけ奴隸制撤廃運動などの社会運動は、信仰復興の盛り上がりという背景を抜きにしては考えられない。以上のように見てくるならば、アメリカの福音主義運動は政教分離にも関わらず、否それ故にこそかえつて「政治化」していったと言える。

福音主義的キリスト教の「政治化」は、奴隸制をめぐる論争において頂点に達した。奴隸制を道義的悪と指弾する北部福音派と、それを南部固有の伝統的社會秩序として擁護する南部福音派との対立は、内戦の勃発に先立つて、各教派内部の南北分裂を招来した。今日に至るまでの、南北両地域のキリスト者の性格の違いは、この時の分裂に起因しているところが少なくない^⑥。

南部のキリスト教は、バプテスト派、メソジスト派、および長老派であり、この三つの教会が南部福音派のエスタブリッシュメントとなっている。福音派はもともと南部に土着の宗教ではなかったが、時代を経て次第に南部に浸透していき、ついには南部を代表する宗教風土を形成した。そのため南部は全米でも類を見

ないほど福音派キリスト教が支配的な地域になった。^⑦

アメリカは初めから「政」と「教」が一致していた国である。十九世紀にアメリカを訪問したフランス人アレクシス・ド・トクヴィルはアメリカの宗教について次のように述べる。「イギリス系アメリカ人は民主的な、そして共和的な宗教と呼ぶのが最もふさわしいキリスト教を、新世界に持って来た。これは公務における共和制と民主制との確立を著しく促進した。初めから政治と宗教は同一の意見を持っていた。そして、それ以後でも、これら両者は同調することをやめていない。^⑧アメリカにおける政教分離とは、「政治と宗教の分離」ではなく、「国家と教会の分離」なのである。だから、大統領就任式が牧師を前にして聖書に対して誓約し、さらに讃美歌まで歌うことから分かるように、決して厳密な意味で政治と宗教が分離されているわけではない。そうではなく、国家が特定の宗教を立て、また支援すること、つまり端的に言えば国教会制度を禁止しているということである。^⑨

トクヴィルはまた「宗教的熱情」と「愛国心」が結びついていることを指摘している。アメリカでは宗教的熱情が絶えず愛国心の原動力を培うことを見た。トクヴィルは個人の魂を救済する神を有する宗教と、社会や秩序や正義をつかさどる神を有する宗教とを区別した。^⑩

教会と国家の密接な関わりは後に「市民宗教」と言われるものを作り上げることになった。市民宗教はキリスト教のプロテスタンティズムとカトリシズム及びユダヤ教の三つに共通なものと言える。市民宗教は、この三つの既成宗教に共通な旧約聖書とその神だけを重視し、イエス・キリストやローマ教皇には一切ふれない。市民宗教は古代イスラエルになぞられてアメリカ合衆国を「新しいイスラエル」と呼び、アメリカ国民を古代イスラエル民族と同様、神に特別に選ばれて大きな使命を託されている「選民」だと見なす事実によく表わされている。市民宗教には次の三つのタイプないし側面がある。第一のタイプは文化宗教ないし民

俗宗教とも呼び得るもので、アメリカ的生活様式に等しい。第二のタイプは宗教ナショナリズムで、国家を正当化する宗教的パワーを持つ。第三のタイプは超越的な宗教で、一神教であるキリスト教、ユダヤ教を前提とするが、具体的な個別の宗教、教派を超越した国民的宗教心といったものである。宗教社会学者ベラーによれば、アメリカ歴代大統領の就任式は、この市民宗教における重要な儀礼的出来事であり、何よりも最高の政治的權威の宗教的正当化を確認するものだと言う。また、メモリアル・デイの戦没者追悼式典は、地域共同体を市民宗教に統合する働きをしたと考えられている。^⑪

Ⅱ. キリスト教原理主義の起源と変遷

A. 一九二〇年代のキリスト教原理主義（ファンダメンタリズム）

キリスト教原理主義を理解するために、二十世紀のアメリカのキリスト教会リベラル派（自由主義神学派）とファンダメンタル派（根本主義派）の二つの流れを概観しよう。米国のファンダメンタリズム（現在では原理主義と訳されるが、キリスト教界では長いこと根本主義という訳語を使っていた）には、二つの分水嶺がある。一つは一九二〇年代、もう一つはレーガン時代の一九八〇年代である。アメリカのキリスト教界はリベラル派とファンダメンタル派の二つより成り立っているので、二つの流れを概観したい。

1. 近代主義と信仰

南北戦争の終結と奴隷解放は、反奴隷制を共通の信条とすることで保たれてきた北部福音派の一体性を大きく揺るがす結果となった。時あたかも近代的産業主義が勃興し、科学的合理的な世界観が北部都市を中心に急激な広がりを見せ始めていた。信仰の世界に再び危機が訪れたのである。それは、二つの危機、つまり、リベラルな聖書解釈によってもたらされた危機とダーウィンの進化論によってもたらされた危機である。

第一の危機はリベラルな聖書解釈によってもたらされた危機である。二十世紀の初めは、いわゆる「社会的福音 (Social Gospel)」の運動が盛んな時代であった。南北戦争 (一八六一―一六五) の終結とともに、アメリカ資本主義社会の工業化が急速に進み、それまで農業社会におけるのとは異なる、新しい社会問題が起って来た。ウォルター・ラウシェンブッシュ (ロチェスター神学校教授) などによってプロテスタント教会に社会問題の意識が高まり、一九〇八年に諸教派から成るキリスト教会連盟 (Federal Council of Churches) が結成され、協力して工業社会の社会的・経済的問題と取り組むことになった。¹²⁾

信仰の世界に訪れた危機の一因は、キリスト教界の内側に発するリベラルな聖書解釈の動向にあった。より自由主義的福音主義者は新しい科学の優越性に譲歩して新しい形においてアメリカプロテスタント啓蒙主義の古い調和を保とうとした。ここから神学的近代主義が出て来た。¹³⁾ 聖書を歴史的文書資料として見直し、科学的な思考や歴史的な思考に基づいて再解釈し、聖書の神話的、非科学的部分を画定すべきであると主張するこのリベラルな動向が、聖書主義、回心、キリストの再臨などを絶対視する保守的な福音主義の基盤を大きく掘り崩しつつあったのである。¹⁴⁾

しかし社会的福音の運動を支持した教職者や信徒の大部分は、神学的には自由主義神学に立つ人々であった。つまり、ドイツのいわゆる近代神学の影響を受け、聖書の歴史的批判を受入れる、いわゆる「近代主義者 (モダニスト)」たちであった。当時自由主義神学に立つ主流派は全キリスト教人口の七〇%を占めていた。これに対し、保守的な少数派 (二五%) は、近代化傾向を拒否し、旧新約聖書全体を「神の言葉」として重視する「キリスト教原理主義 (ファンダメンタリズム、根本主義)」の立場を固守した。その結果、プロテスタント教界全体が「主流各派」と「原理主義・根本主義者」そして、そこから別れた「福音派」に大きく分裂して今日に至った。リベラル派と根本主義者は一九一四年頃から激しく対立した。保守派はキリスト教信

仰の根本的教理を固守するところからファンダメンタリスト（原理主義者、根本主義者）と呼ばれるようになった。

しかし、何と言ってもこの時期の福音主義的信仰にとつて最大の危機は、チャールズ・ダーウィンが提唱した進化論によつてもたらされた。それは、自然現象を観察と実験に基づく科学の対象とし、そこから自然世界を科学的に再構成するという科学革命のもたらしたものである。それは生物学上の革命的理論でありながら、そのような科学の一分野をはるかに超える社会的衝撃をもたらした。人類を含め全宇宙の万物を神の被造物とする聖書の記述を真実と考え、これを信仰の基礎におく福音主義者たちにとつて、生命のないところから生命が発し、与えられた自然の環境との何億年にもわたる交渉と適応の過程を経て様々な種が生まれ減びてきたとする進化論は、信仰の根本を破壊しかねない衝撃であった。こうして進化論の登場とともに、「近代主義と原理主義（根本主義、ファンダメンタリズム）」という、以後今日まで一世紀半にわたるアメリカ・プロテスタンティズムを二分する非妥協的対立軸が形成されたのであった。

2. 原理主義者と天啓的歴史観（デイスペンセーションナリズム）

十九世紀から二十世紀にかけての世紀転換期に、進化論に対する保守的な福音主義者たちから激しい抵抗が繰り返された。その主だった人々は、一八九五年ナイアガラに集い、危機に直面したキリスト者が信すべき「根本主義原則」を採択した。根本主義派は一九一〇―一二年に二巻の小冊子『根本的なもの（Fundamentals）―真理への一証言』を出版した。その「根本主義原則」とは、聖書の逐語靈感・キリストの処女降誕・キリストの代理的贖罪・キリストの身体的復活・キリストの可視的再臨から成る。この小冊子は一般向けに分かりやすく書かれ、二人の信徒の実業家の財的援助によつて約三百万部も広く配布され、ファンダメンタリズム（原理主義、根本主義）を有名にした。

根本主義と自由主義の論争は全国の教会と神学校を二分するほどの対立を生み出した。プリンストン神学校のメイチェンとコーネリウス・ヴァン・ティルが一九二九年に辞職し、フィラデルフィアにウエストミンスター神学校を作り、正統的長老教会 (Orthodox Presbyterian Church) を作った。一九三七年にメイチェンが死去するにともない、彼の過激な弟子カール・マッキンタイヤはさらに別の教会、聖書長老教会 (Bible Presbyterian Church) と、より徹底したファンダメンタリズムを標榜するフエイス神学校を創立し、益々分離主義的な方向をたどるようになった。¹⁵⁾ 根本主義者たちは、社会的福音に対抗する意味もあつて『ザファンダメンタルズ』を用いて、根本の教理を守り、社会的責任を果たすよりも、燃えている世界から一人でも多くの魂を救うことが大事なのであると考えるようになった。

キリスト教原理主義者たちの『ザファンダメンタルズ』に示された神学的立場から見ると、現状における人間社会は罪に汚れ、破滅に向かって進みつつある「前千年王国」の段階にある。キリストの再臨がいつあってもおかしくない今、すべてのキリスト者は悔い改め、信仰を堅くすべきであると主張するこの前千年王国説は「天啓的歴史観」(デイスペンセーションリズム) に立脚していた。イギリスで同じような危機感のもとで信仰復興を行なった「プリマス兄弟団」によってアメリカに持ち込まれたこの神学思想は、創造から終末までに至る歴史を七つの時代に分ける独自の神学を持ち、歴史の出来事をその中で位置づけ、将来を予測するというジョン・ダービーというイギリス人の歴史観である。この人が前千年王国説を普及させた。¹⁶⁾ 聖書のうちでもとりわけ預言書的な性格の強いダニエル書や黙示録のメッセージを重視し、古代から現在に至るまでの種々の重大事件はつとに聖書に預言されていたという注解を行ないながら、終末におけるキリストの再臨を待ち望むというものであった。それは福音主義者の現世的戦闘性を生み出すことになった。その影響は遠く、中東情勢を語る時にハルマゲドンに言及する現代のテレビ福音伝道師の言説にまで及んでいる。

この危急の時、手をこまねいていたら、われわれキリスト者は墮落したまま千年王国を迎えなければならぬ。眼前の戦いこそが、まさにキリスト者にとっての最終的な戦いであるという。この終末論的思考が、現代のキリスト教原理主義に独特の熱狂的で好戦的な色合いを添えているのである。¹⁷⁾

天啓的歴史観は制度的な教会の衰退と背信、それに伴う文化の退廃、邪悪な制度からクリスチャンが離れることの必要性を強調し、未信者の救済とこの世の悪から純潔を保つことが教会の使命だと考える。このように天啓的歴史観は、聖書の預言を歴史的に成就する超越的で超自然的な神の働きと支配として強調する。その結果、この世の出来事や現象について人間的な要因、文化的・社会的条件、政治的・経済的な背景、歴史的なプロセスなどを分析することに、天啓的歴史観はほとんど興味を示さず、聖書の預言に関係する限りこの世の出来事に意味を認めることになる。¹⁸⁾

この貧弱な知的活動の傾向をホイートン大学のマーク・ノル (Mark A. Noll) は次のように告発する。「原理主義運動 (根本主義運動) はキリスト者の考え方を正そうとし、特に天啓的歴史観は原理主義 (根本主義) とそれ以降の福音主義に組織的聖書解釈を提供しようとした。しかし、原理主義 (根本主義) と天啓的歴史観は、知的貧困という重大な問題を福音主義にもたらした点で、告発されるべきである。原理主義 (根本主義) を助産婦として、福音主義社会は神のもとで自然世界がどのように動くのか、人間社会がどのように機能するのか、人間の性質がいかに働くのか、何が文化の祝福や危険をもたらしたのか等について、洞察と呼べる貢献を殆ど何もしてこなかった。福音主義は、原理主義 (根本主義) の特定の特徴についてしばしば反対しながら、原理主義 (根本主義) メンタリテイの大部分を継承してきたので、この世の知見を解明する知的活動において貧弱な収穫しか得ていない」¹⁹⁾

原理主義 (根本主義) の基本的神学上の特色は、その対抗主義にある。原理主義 (根本主義) は、現代的

なものとの対決における正統主義である。「現代的なもの」への原理主義者の反発は、文化に対する分離主義的態度を伴っている。幾つかの中心的教理（中でもとりわけ聖書の絶対的、字義通りの権威と、キリストの千年期再臨）が、世俗の文化を遠ざけるとともに、原理主義者に一体感と目的を与えることを意図して、防御柵として扱われた^②。

二十世紀も第一次世界大戦以後になると、原理主義的な福音主義は大きく退潮してゆくことになる。その決定的な契機と目された事件は、有名な「進化論裁判」であった。それ自体きわめてよく知られた事件であるが、要するに、保守的なテネシー州で進化論を教えた学校教師ジョン・T. スコープスが、進化論教育を禁じた州法違反で訴えられた裁判であった。判決は、被告スコープスの敗訴となった。しかし、裁判は全国的な注目を浴び、とりわけ東部都市のメディア、知識人は、「原理主義者」を時代遅れの頑迷な田舎者として揶揄し、ステレオタイプ化することに成功した。「原理主義」は、全国的な世論の法廷で敗北したのである。

このように、スコープス裁判は、一面で、北部の世俗的でありベラルな世論が、南部の保守的で後れた宗教観を批判するという構図で戦われたものと言える。つまり、南北対立の文化版、宗教版と言ってよい。南北戦争で敗北した南部は、この裁判で再び文化的にも敗北したのであった。この時、「原理主義」は、その後半世紀にわたる退潮期を迎えることとなった。しかしそれは決して「原理主義」の死滅を意味したわけではなかった。原理主義者たちは、その後独自の聖書学校を開いたり、独自の情報ネットワーク組織を作ったりするなどして、雌伏し生き延びてゆくのである^③。

二〇〇五年の米国のキリスト教原理主義者たちによる進化論批判は神という言葉を避け、生物誕生には何らかの「インテリジェント・デザイン（ID＝知的計画）」あったと言う批判の形をとって行なわれている。IDとは、多様で精密な世界の生物の誕生には、時計に設計者がいるように、何らかの知的計画がかかわ

た、という考え方である。聖書の創造説と違い、科学的推論だと主張する。科学者の多くは、実証できない領域に説明を委ねているとして、「神とは言わない創造説」だと警戒する。進化論と創造説は、米国の教育現場でぶつかってきた。だが一九八七年に最高裁が公立学校で創造説を教えることに違憲判決を出し、創造説は教室に入り込めなくなった。IDは英国の神学者が十九世紀初頭に提唱し、米国で注目されたのはこのころからとされる。二〇〇五年十一月に公表されたオハイオ大の世論調査によると、米国では五四%の人がこの世を神が造ったと信じている。公立学校でIDを教えることに賛成する人も五〇%に及ぶ。キリスト教右派が根を張る米国で、IDの広がる素地はすでにある。米連邦地裁は二〇〇五年十二月二十日、公立高校で「インテリジェント・デザイン（ID＝知的計画）」を教えることは、国教の樹立などを禁じた合衆国憲法修正第一条に違反するとの判断を示した。²³

一九二五年の「スコープス裁判」を分水嶺として、一九三〇年から一九七〇年代までは、原理主義者はアメリカ社会の表舞台から姿を消していたのである。アメリカ社会全体が世俗化し、キリスト教原理主義（根本主義）の信仰理解がアナクロニズム（時代錯誤）と思われるからである。社会の世俗化に対抗して、原理主義者たちは益々信仰理解を頑強にし、アメリカ社会の一般的傾向から分離して、幾つかの小さなセクトとして存在するようになっていた。

第二次世界大戦後の東西冷戦時代は、核兵器による人類の絶滅の恐怖が実感された時代であった。アメリカ・キリスト教界の主流教派はNCC（全米キリスト教会協議会）を形成し、この時代にリベラル化の傾向を強め「世界教会協議会（WCC）」などの超教派の機関を通して平和運動などの活動を行なっていった。これに対して原理主義者たちは、反共主義・アメリカ至上主義の立場をとるようになっていった。

一九五三年のマッカーシー上院議員による「赤狩り」の時代、原理主義者（根本主義者）のリーダーの一

人であつたカール・マッキンタイヤは、キリスト教界における「赤狩り」の先頭に立った。マッカーシー旋風の過ぎ去つた後、原理主義者（根本主義者）は益々、アメリカ社会においてセクト的傾向をもつた集団となつていった。²⁴

B. 原理主義の中から生まれた福音派（新福音派）の形成と台頭

一九四〇年代には根本主義のグループが戦鬪的分離主義グループと穏健なグループに分裂した。穏健なグループは「福音派」（エバンジェリカル）、「新福音派」（ニューエバンジェリカル）と呼ばれた。信仰の根本においては原理主義（根本主義）と同じでありながら、その排他的分離主義や反知性主義を支持できず、といつて自由主義的（これには新正統主義も含まれる）なNCC（全米キリスト教会協議会）やWCCにも同調できない、信仰と神学において保守的な人々の中から生まれて来たのが、いわゆる福音派（エバンジェリカル）である。福音派は「聖書の権威や個人的回心を特別に重視・強調する保守的プロテスタント」である。

福音派は一九四二年にNAE（National Association of Evangelicals 米国福音同盟、米国福音主義者協会）を設立し、設立から一九七〇年頃まではプロテスタント主流教派とカトリックと並ぶ第三勢力となつた。自分たちのことをエバンジェリカル、即ち、キリストの福音と宗教改革の福音主義に忠実な福音主義者と呼ぶのである。NAEに加盟しているのは、三〇余りの小教派の他、主流教派に属しながら個人の資格で参加している者を含めて約三百万人から四百万人と言われる。²⁵ そのほかにNAEに加盟していない教派（南部バプテスト一六〇〇万人強、ルーテル派ミズーリ・シノッド約三〇〇万人）、無所属のエバンジェリカルなど多数いる。アメリカの成人の二〇―二五%で、人数で言えば四千万人を数える。

福音派の台頭に一番貢献したのはビリー・グラハムの大衆伝道の成功で、グラハムは福音派の代表的人物となつた。この多数の福音派の存在、そしてそれに共鳴するいわゆる「平均的なアメリカ人」の存在が、大

衆伝道者ビリー・グラハムの大衆伝道の成功の背景である。ビリー・グラハムはもともと原理主義から出発したが、その狭量性から脱出して漸次、より包括的な福音派に成長していった人である。

グラハムの全米的、いや世界的なリバイバル集会、伝道集会の他に、福音派が推進しているのが「ワールド・ビジョン」「ユース・フォー・クライスト」「キャンパス・クルセード」「キリスト者学生会（インターバール・シテイ・クリスチャン・フェローシップ、IVCF）」である。これらの諸運動はみな、広義のファンダメンタリズムであるが、古い反文化的、反知性主義的な狭いファンダメンタリズムを克服して、主流教派の外からではなく内から、教会を真に聖書的、福音的な教会にしようとする、エバンジェリカルな諸運動である。これらはみな、聖書を神の言葉として重視すると共に、神およびイエス・キリストへの人格的な信仰を強調し、形式的に洗礼や聖餐を受けたり、教会員になることなく、霊的に再生し、真に信仰にコミットするように伝道する。

福音派の成長の秘密の一つは、古いファンダメンタリズムの反知性主義に対抗する知性尊重の努力にある、と言って良いくらいである。その代表者はエドワード・カーネルであった。カーネルは福音派の代表的大学ホイトン大学、ウェストミンスター神学校を卒業し、ハーバード大学神学部で、ラインホルド・ニーバーについて博士号を取り、フラー神学校の教授になった。もう一人は、福音派の代表的雑誌『クリスチャニティ・トウデー』（二〇〇四年現在二三万部発行）の創設編集長のカール・ヘンリーである。ホイトン大学、ノーザン・バプテスト神学校を卒業し、ボストン大学で博士号を取得し、フラー神学校の最初の教授になり、一九四七年に『現代ファンダメンタリズムの不安な良心』を書いた。

ファンダメンタリズム（原理主義・根本主義）と言えば、反科学主義であるという悪評をなくすためにも、聖書と科学の問題も真剣に取り上げている。既に、一九四一年に五人の福音派の科学者によって、アメリカ

科学協会 (American Scientific Affiliation) が発足したが、現在では、二〇〇〇名を超える福音派の科学者の団体に成長している。

伝道を主題として二つの世界大会が開催された。福音派が全世界への福音伝道、宣教を行なった。米国の福音派が中心となって、二つの世界大会が伝道を主題として開催された。一つは、一九六六年にベルリンで開かれた世界伝道会議で、一〇〇カ国、一二〇〇名が参加して行われた。全人類への福音の伝道こそが福音派の最大最緊急の任務課題である。もう一つは一九七四年七月にスイスのローザンヌで開かれた世界伝道会議で一五〇カ国、四〇〇〇人が参加して行なわれた。最後に一五か条の「ローザンヌ誓約」を採択した。ローザンヌ誓約第五条は「キリスト者の社会的責任」で、はつきりとこれまで社会的責任を「無視してきたこと、そして時に伝道と社会的関心を相互排除的にみなしてきたことを懺悔する」と表明し、さらに「伝道と社会的参与は、我々キリスト者の義務の両部門であることを肯定する」と述べ、「行為なき信仰は死んでいく」と結んでいるからである。²⁶⁾

ギャラップ調査によれば、一九九九年のプロテスタントの人口比率は五五%、カトリック二八%、ユダヤ教徒二%、非キリスト教徒六%、世俗的(無宗教的)八%である。キリスト教のプロテスタントの福音派二五・四%、主流派二二・一%、アフリカ系アメリカ人(黒人)各派七・六%の三つに大別され、このうち福音派だけが伸びていて、三〇年間に人口比率で主流派を追い越し、その地位を逆転させた。²⁷⁾

ここでアメリカのカトリックについて少しふれよう。アメリカのカトリック教会は二〇〇年前の独立戦争当時の僅か二万人から、今日の約五千万人に、人口一%から二三%に増加した。そして、一九六〇年にカトリックの信徒ジョン・F・ケネディが大統領に当選することによって、カトリックは、アメリカ社会における二等市民ならぬ一等市民として公認されることになった。それに加えて、ローマ・カトリック教会は、教

皇ヨハネス二十三世によつて第二バチカン公会議（一九六二―六五年）が開かれ大きく変わった。一九八九年のクリスチャン・コアリション（キリスト者連合）の会員の九〇％は福音派あるいは原理主義者であり、残りはカトリックとユダヤ教の保守派である。ポーランド生まれのローマ教皇ヨハネ・パウロ二世（一九二〇―二〇〇五年、教皇一九七八―二〇〇五年）の政策は平和主義であつた。ドイツ生まれのベネディクト十六世（教皇二〇〇五年―）はヨハネ・パウロ二世の平和主義を踏襲している。アメリカのカトリックは平和主義とアメリカ至上主義との間に揺れている。

Ⅲ. 一九八〇年代以後の原理主義・福音主義の政治化の急進展

1. 一九八〇年代のキリスト教原理主義・新宗教右翼・福音主義の政治化への台頭

福音派は一九七〇年代から八〇年代にかけ、政治的・社会的活動に大規模に動員され、積極的に参加するようになった。いかなる理由によるのであろうか。大体次の諸点を挙げることが出来る。

福音派にしろ原理主義者にしろ、保守的な人々は、もともと「福音のみ」「信仰のみ」を掲げて政治に非介入が信条であつた。ところが、六〇年代以来、伝統文化を批判・否定する対抗文化が力強く台頭し、それに伴つて許容的社會が広がつた。南部地方を中心とする福音派の人々の、サブカルチャー（下位文化）が崩壊の危機に直面した。また、七〇年代、多元主義や宗教的寛容、包括主義といったリベラルな風潮がアメリカ全土を覆つたことに危機感を持ち、「古き良きアメリカ」の価値、伝統的な家族観、父親の權威の復権、同性愛反対、妊娠中絶反対、公教育における祈りの復活などを社会的に掲げるようになった。このままではアメリカは駄目になってしまう、もう一度生活の土台をイエス・キリストの教えにとらえなおさねばならないと彼らは考えた。^②

フランシス・シエーファアやカール・ヘンリーら当時活躍した神学者の啓蒙的著作類がアメリカ人の一般人によく読まれ、大きな影響を与えた。福音派のラジオ・テレビ伝道師が競って宗教放送を発売に行ない、おびただしい数の視聴者を啓発した。ビリー・グラハム、レックス・ハンバード、オーラル・ロバーツ、ジェリー・ファルウエル、パット・ロバートソンなどである。彼らは最高裁の中絶自由化判決などにともなって、宗教的メッセージだけでなく政治的メッセージも精力的に放送するようになり、福音派全体の政治化に大きく寄与した。

このような時、ビリー・グラハムは、また、ベトナム戦争（一九五四―七三年）を積極的に支持していた。グラハムはニクソン大統領の特使としてベトナムのサイゴンに行き、大統領は前線のアメリカ将兵を見捨てないというメッセージを伝えた。ビリー・グラハムは科学万能主義がアメリカ文化の浅薄化を象徴しているとしてそれに異議申し立てをした大衆伝道者であるが、グラハムのキリスト教理解には一つの大きな弱点があるとラインホルド・ニーバーは指摘した。現代の社会問題に対していかなるリアリスティックな解決の方向性も打ち出そうとしない、宗教に名を借りた道徳的中立がそれである。グラハムによる宗教的悔い改めの強調は、死の恐れといったような個人の内面の問題に対しては確かに力となる。しかし、個人の悔い改めが冷戦の問題や人種差別の問題をも一挙に解決に導くというがごとき主張は、福音の誤解であり、幻想である。グラハムの大衆伝道の問題は、歴史の複雑性や現実の曖昧さを十分に凝視していないが故に、キリスト教の信仰を問題解決の安易な道具と見なす陥穽にはまっているところにある。ここにニーバーは、罪の凝視によってキリスト教リベラリズムと対極的な立場に立つグラハムが、集団の力関係に関してキリスト教リベラリズム以上に楽観的であるという歴史のアイロニーを見て取っている。アメリカという国家の道徳的問題性を批判する神学的視点が十分でないことがグラハムの最大の問題であるとニーバーは述べた。ニーバーの

問題提起は、宗教的悔い改めを人種差別や国家的傲慢と無関係に強調するキリスト教が、アメリカ社会からますます預言者的精神を薄める結果を生んでいるのではないかという点にあった。²⁹⁾

スコープス裁判以来、逼塞していた福音主義的な原理主義が復興してくる原因は、より直接的には広範な社会層を捉えていたニューデイル・リベリズムの衰退に、そしてその過程で生まれた、ベトナム反戦運動や対抗文化の跳梁にあった。反戦運動は反アメリカ的であり、対抗文化は快樂主義以外のものではないと福音派そして原理主義者は考えた。

一九七〇年代末以降興隆してきた新たな原理主義的信仰復興運動の、これまでの運動には見られなかった特色は、その著しい政治的性格である。それは、草の根の保守的福音派を捉えただけでなく、大統領を含む連邦政治をも巻き込む政治運動ともなっていた。この政治と原理主義との、現在もお深まり行く関係を考える上で決定的に重要な意味を持つ存在は、ジョージア州出身の民主党大統領ジミー・カーターである。福音派のジミー・カーターが大統領になった年である一九七六年は「福音派の年」と呼ばれた。カーター、レーガン、クリントンの三人の大統領は三代続けて、信仰による「生まれ変わり」を経験し、そのことを強調した。これら大統領による「生まれ変わり」の強調は、各教派を超えた、あるいはどの教派にも共通に見られる福音主義的信仰を、政治の世界に導入することを意味しているのではないか。それは、アメリカが改めて政治の基礎に福音主義的キリスト教を据え直したことになるのであろうか。特定教派と国家との結びつきを禁じた政教分離原則の下で、今アメリカにはそれとは異なる政教一致のシステムが密かに根つき始めているように思われる。³⁰⁾

2. 新宗教右翼の登場

(1) 一九七九年 モラル・マジョリテイ（道徳的多数派）の設立

アメリカのほぼ五千万人の原理主義者と福音派の人々は、投票の為の選挙登録さえしていない人々であった。新宗教右翼（ニューライト）はテレビ伝道者を利用して、この「眠れる巨人」の目を覚まさせ、政治における一大保守勢力を形成しようとしたのである。それが「新宗教右翼」であった。一千万の原理主義者の教会をベースに、五千万の福音派・根本主義派の保守層を中心に構成された。一九七〇年代末頃から、宗教保守派は世俗的（非宗教的）なニュー・ライトとの関係を緊密化させる一方で、中絶反対運動では過激化の傾向を示した。

宗教保守派の歴史の上で一時期を画したのは、一九七九年の「モラル・マジョリテイ」（道徳的多数派）の結成であった。共和党保守派の大統領を実現させるため、ニューライトの指導者達は、人気のあるテレビ伝道師に目をつけ、その視聴者を中心とする保守派の草の根組織創設をジェリー・ファルウエルに持ちかけた。ダイレクト・メールの技術などは、リチャード・ヴィゲリーら専門家達が提供し、世俗的保守派と宗教的保守派の「結婚」が成立した。^①一九八五年にモラル・マジョリテイの会員が六五〇万人に達した。彼らは自らを宗教団体でなく、政治団体と主張した。

モラル・マジョリテイは、七〇年代以降のアメリカ社会の現実に対して危機意識を持ち、国家が道徳的に低下していくことを憂慮し、国家の基礎である伝統的な家庭と道徳的価値が多くの不道徳な世俗的人間中心主義者や自由主義者によって破壊されつつある現実に、嫌気をさしている。アメリカ合衆国に道徳的健全さを取り戻すことを、唯一の関心とする。モラル・マジョリテイはキリスト教ニューライトを中心とした生命性、家族での伝統的価値の巻き返し運動である。

モラル・マジョリティの主張は次の三つを特徴とする。

第一は世俗的人間中心主義 (humanism) への批判である。J・ファルウェルは「絶対的権威に対する認識がアメリカ社会から消え去った時から、アメリカの悲劇が始まった」と主張したが、それは特に教育の場から絶対的権威(神)が喪失したことへの批判であった。具体的な主張としては、公立学校での祈りの時間の復活、進化論と並んで「創造科学」を教えることを要求した。これはキリスト教主義学校の内容への政府の干渉拒否であった。

第二は伝統的な家庭を守ること (Pro-family) である。この主張としては、人工中絶反対、男女同権法案反対、ホモの権利を認める事への反対、家庭の教育に対する公権力の介入の反対などである。ドラッグやロック文化やポルノに対する反対も、それが伝統的な家庭の価値を否定したり批判したりしているという理由からであった。

第三はアメリカ至上主義である。これについては、彼らは第二次世界大戦後の原理主義者が進めてきた路線を継承し、単純な二元論的理解によって、自由主義国をキリスト陣営、共産圏を反キリスト陣営と理解し、アメリカに敵対する勢力は神に敵対する悪魔であると認識していた。悪魔に対してはいかなる手段も正当化されるのであり、軍備の増強支援や核兵器削減への反対の背景は、このような世界認識があった。^②

モラル・マジョリティは最初、同じ福音派のよしみから、カーター大統領を支持していたが、カーターが民主党出身という限界もあって伝統文化回復への福音派の期待に余り添えなかったため、一九八〇年の大統領選挙では、共和党保守派のレーガン支持に切り換えた。この時、伝統的なアメリカ的価値の復活、「神のもとなる国家」アメリカに対する危機意識があった。レーガンはこの危機感と不満に応える形で「古き良きアメリカ」の価値観を主張したが、それは一九六〇年代、七〇年代の対抗文化に対する「カウンター」(対抗)

であり、復古主義にすぎなかった。レーガン大統領の時代（一九八一—一九八九年）は、原理主義者と新宗教右翼にとって絶頂期であった。モラル・マジョリティは、政治勢力として拡大し、旧ソ連のアフガニスタン戦争（一九七九—八九年）の時に、ビンラディンのような人々を育てる力を後押しし、ニカラグアやエルサルバドルでは、革新政権を押しつぶす力を支持した。レーガンが一九八四年に再選された後、モラル・マジョリティは、経済的保守主義者たちに無視され、レーガン自身からも疎外されると、急速に影響力が衰えていった。一九八六年にはファルウエル理事長自身も、政治から身を引いて、伝道牧会の基本に戻ると発表し、一九八七年には事実上解散した。同じ年（一九八七年）テレビ伝道師たちの不祥事が相次ぎ、ファルウエル自身もこれに巻き込まれたことは、モラル・マジョリティに止めを刺した。^⑭

(2) 一九八九年 クリスチャン・コアリション（キリスト者連合）

一九八八年には、かつてやはりテレビ伝道師の一人であったバット・ロバートソンが共和党から大統領選に出馬して当時のブッシュ副大統領に簡単に敗れたが、ロバートソンは、その時のダイレクト・メール・アドレスを活用して、一九八九年に新しい宗教保守派団体「クリスチャン・コアリション」を立ち上げた。創設時からプロの若手政治活動家リードをナンバー二の事務局長に据え、全米に七〇以上の政治要員養成所を開き地方活動家の訓練を続けた。モラル・マジョリティは、キリスト教原理主義の教理に基づく過激な政策を掲げたが、コアリションは、宗教色を薄め、主な政策目標も世俗的・経済的保守主義に近いものに拡大した。コアリションは最高時、会員二〇〇万人に達した。福音派の中で積極的に政治に関わりようとする勢力を宗教右派と呼ぶが、キリスト者連合はプロテスタントやカトリックの保守派を教派横断的に組織した代表的な勢力となった。このような勢力が全米三十一州の共和党組織を支配下に治め、いわば共和党の大票田となっている。キリスト者連合の中核は「福音派」である。^⑮

道徳的多数派やキリスト者連合が政治化し、「新宗教右翼」と呼ばれ、南部だけでなく全米に組織を拡大し、政治勢力としての新宗教右翼は侮れないものになっていった。一九九一年のソ連の崩壊を始めた共産圏の崩壊は彼らに自信を与え、キリスト者連合などの草の根の人たちは、共産主義陣営と戦うことは、終末論的意味を持った宗教的行爲であった。一九八五年、ロバートソンはニカラグアの反政府ゲリラのコントラへの援助を始めた。ロバートソンは自分のテレビ番組『七〇〇クラブ』で中南米の「解放の神学」とニカラグアのサンディニスタ政権の問題を取り上げ、コントラに資金を送った。このようにキリスト教右派による原理主義的信仰の復興運動は従来の信仰復興運動に比べ、その政治性において際立っている。二十世紀初頭の原理主義運動は、聖書の神学的な解釈をめぐるキリスト教界の内部的現象という色彩が強かった。それに対して、八〇年代の信仰復興運動は、極めて具体的な政治的争点を梃子に進められてきたと言つてよい。³⁵⁾ さらに厄介なことであるが、聖書を逐語的に解釈する原理主義者たちは、政治化する一九八〇年代から「福音派」を自称するようになって、メディアはそれに乗つてキリスト教右派を福音派という言葉で十把ひとからげに括つてしまふ傾向を強くしてきた。³⁶⁾

2. 父・子ブッシュ大統領とキリスト教原理主義

(1) 父ブッシュ大統領、クリントン大統領、子ブッシュ大統領と宗教右派

レーガン大統領の後を受けた父ブッシュ大統領（一九八八―九二年）は、本質的にはエスタブリッシュメントのエリートであつた。副大統領にクエールを選んだのは、クエール夫人が熱心な原理主義者であり、新宗教右翼はクエールをレーガンに代わる自分たちの利益代表と考えていたからである。新宗教右翼はブッシュの南部での圧勝の、人的、資金的な原動力となつた。ブッシュは新宗教右翼の歓心を買つた。湾岸戦争（一九九一年一月十九日―二月）の時ブッシュ大統領はビリー・グラハムを招き、共に祈つた。

父ブッシュ大統領の次に政権を担当したのは民主党のクリントン大統領（一九九二―九六年、九六―二〇〇〇年）であった。この八年のクリントン政権時代、新宗教右翼はクリントン政権の批判者としてその力を発揮した。

民主党が現在よりも強力だった九〇年代初頭には、共和党は宗教右翼に頼らざるを得なかったし、クリントン政権という明確な攻撃対象があった。共和党は候補者を立てるにも宗教右派の意向を無視することが出来なかった。二〇〇〇年、新宗教右翼の支持を受けて、子ブッシュ大統領が誕生した。共和党のブッシュ政権はキリスト教右派を取り込むことで成立した。前回の大統領選挙で宗教右派の有力候補だったアッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の牧師の息子のアシククロフトが司法長官、生物倫理委員会では宗教右派のお気に入りのレオン・カスが委員長となった。^⑦

(2) 米国同時多発テロ後のネオコン（新保守主義）の台頭と原理主義との結びつき

二〇〇一年九月十一日米国は同時多発テロに見舞われた。そしてこの時全く予想しなかった形で、アメリカの方向に大変化が起こった。愛国主義と原理主義的宗教の復活であった。クリスチャン・コアリション（キリスト者連合）を始めとする宗教右派の強力なサポートの下に成立した子ブッシュ大統領を国民の八割以上が支持した。

九・一一の国家の危機に際して、政権内部ではネオコン（新保守主義、ネオコンサーバティブ）と呼ばれる人々が、アフガニスタン戦争、そして、イラク戦争に突き進むように、ブッシュ政権の決定に大きな役割と影響力を及ぼした。ネオコンとは、八〇年代のレーガン政権の頃から強まってきた保守主義の潮流のことである。民主党の反共リベラル派が源流である。ネオコンは①単独でも軍事力を行使する。②世界を善悪二元論的な対立構図で見なし、外交に道義的明快さを求める。③国際協調主義に懐疑的―などが特徴である。

ネオコンの最も先鋭的な先制攻撃論は、ブッシュ・ドクトリンとして国家の安全政策にも採用された。ネオコンは①宗教的な使命感で新秩序を作ろうとした民主党大統領のウィルソンの「理想主義」と②ソ連を「悪の帝国」と名づけた共和党大統領のレーガンの剛腕外交の二つの「奇妙な結合」（ケネディ・エール大教授）と言われる。

ユニラテラリズム（単独行動主義、自国本位の一方的外交）に向かって突き進むアメリカの時流に油を注いでいるのが、キリスト教右派とネオコン（新保守派）の出会いである。新保守主義運動は一九七〇年代に、共産主義へのためまぬ敵意とアメリカの覇権というイデオロギーに基づいた反共主義の布陣として始まった。「アメリカの価値観」という文句は、元々アーヴィング・クリストルなど、かつてはマルクス主義者であったが、後に完全に（かつ宗教的に）反対陣営に宗旨替えした人々が発明した。ネオコンの中心人物はアーヴィング・クリストル氏と息子のビル・クリストルで、ユダヤ系でイスラムと共産主義から西欧民主主義と文明を守る楯としてイスラエルを無条件に防衛することを、信仰の中心に据えている。彼らは「大イスラエル主義」を唱える。そのネオコンとイスラエルを無条件に支持するキリスト教原理主義者が結びついている。対イラク戦争を推進する圧力の黒幕は、前国防政策諮問委員長リチャード・パール、チェイニー副大統領、国防総省のウォルフowitz副長官、ライス大統領補佐官（二〇〇五年から國務長官）、ラムズフェルド国防長官のようなネオコン第二世代である。^③

(3) 現在のキリスト教原理主義者そして福音派

九・一一以来ネオコンが宗教右派に働きかけて、政治の舞台に宗教右派の人々に彼らの意見を出させるようにしている。宗教右派を支持するのは、草の根のインテリでない人々である。原理主義者そして福音派はどのような特徴があるかを次に述べよう。

第一に、原理主義者そして福音派は、国家観において、アメリカ至上主義を取る。自分たちは米国の建国者たちであるピューリタン（清教徒）の建国の精神を受け継ぎ、自分たちこそ「神に選ばれた民」であると考えている。合衆国で最近行なわれた世論調査によれば、アメリカ人の八六％が、自分達は神に愛されていると信じている。ブッシュ大統領の支持母体になっているのは六〇〇〇万人から七〇〇〇万人の原理主義キリスト教徒で、この人達は預言的な啓示、時には黙示録的な使命感への固い信念や、細かい事実や複雑な問題は軽視するという態度を取る。この人々はアメリカの正義、善良さ、自由、経済的な将来性、社会の進歩などの考えを持ち、アメリカ善い完全な忠誠と愛と考える。また同様に、建国の父たちに対する無条件の崇拜があり、憲法に対してもそうである。愛国心が今もアメリカの最上の美德である^{④④}。

テロ直後の二〇〇一年九月十四日にワシントンの国民大聖堂で行なわれた礼拝で、歴代の大統領経験者や議員達を前にして、ブリー・グラハムは「アメリカの霊的基盤は揺るがない」と語った。その基盤とは「神への信頼」であり、アメリカが危機によってその基盤を更に強固にするかどうかはアメリカ国民の決断にかかっていると述べた。グラハムは穏健な「福音派」の人であるが、アメリカの基盤を聖書に基づくプロテスタント・キリスト教と主張する点で、キリスト教原理主義の人々との違いはない。そして建国をピューリタンにまでさかのぼらせている点でも同じである。ピューリタン達の「神のもとにある契約共同体」という理念が保守的キリスト教のアメリカ理解に受け継がれているのである^{④⑤}。

第二に、原理主義者と福音派の多くの人達は、アメリカは世界に正義と民主主義を教える先生である、と考えている。また、すべての事柄を二元論的に割り切るのである。「キリスト教は善と悪との戦いにおけるナンバーワンである」と主張する^{④⑥}。

「ヨハネの黙示録」がアメリカのピューリタニズムで重要な役割を果たした。「リパブリック賛歌」は敵の

破滅が最終的に永久平和を生み出すという信念を表わしている。また、セオドア・ルーズベルトと同盟した帝国主義者のアルバート・J・ベヴァリッジ上院議員は、二十世紀の始め、上院で演説した。「全能の神は、アメリカ民衆を世界の再生への最終的に導く選ばれた国民としたのだ。これがアメリカの神聖な目的である。我々は世界の進歩についての受託者であり、正しい平和の保護者である」

湾岸戦争（一九六一年一月十九日）では父ブッシュ大統領は「アメリカは常に宗教的な国家でした。おそらく今以上に宗教的であったことはないでしょう」と言い、湾岸戦争の行動を宗教的な絶対原理即ち「善対悪、正義対不正、人間の尊厳及び自由対専制及び抑圧」によって定められた大義であるとしたのである。父ブッシュは湾岸戦争において連合した仲間は全て「神の側にある」と宣言した。政治的には保守的な人であるビルリー・グラハムは大統領と共に立ち「平和のために我々が戦わなければならない時が来た」とその感情を繰り返した。^④

子ブッシュ大統領も「私たちは神の側にある。Oh God, continue to bless America. おお神よ、アメリカを祝福し続けてください」と述べた。神の祝福の下に戦争を行なうことを強調している。

歴代大統領の就任式でプロテスタントの代表として祈りをするビルリー・グラハムでさえ、アメリカの宗教右派や原理主義者・福音派の多くの人たちに、アメリカ政府の政策を支持させるための広告塔の役割を担わせられているように思える。九・一一以後、全米五十一教派、四万三千教会の加入を誇る米国福音同盟（NAE: National Association of Evangelicals）は二〇〇三年三月十九日に始まったイラク戦争を強力に支持した。

第三に、原理主義者と福音派の多くは、イスラエルを無条件に支持する。福音派の多くはイスラエル共和国を「神の子」として、これまでずっと宗教的に解釈してきた。そして現在イスラエルが占領している地域

を、神がユダヤ民族に約束された「聖なる地」と見て、エルサレム及びパレスチナ西岸の返還に反対するシヤロン現政権を強力に支援してきた。イスラエル共和国による「ダビデ王国の復興」は、イエス・キリストが再臨するためには絶対欠かせない条件であり、神はイスラエルを擁護する者を善とされる。世の終わりの前に大戦争が起こるのも神的計画で、イラク戦争はまさに聖書の預言の成就、「ハルマゲドンの予行演習」と歓喜する極右原理主義者もいるほどである。言い換えれば、アメリカの親イスラエル外交の背後に独特な終末論を持った福音派や原理主義者の強い支持がある、ということである。アメリカの保守的キリスト教は、世界最大のイスラエル支援母体になっている。彼らは数十億ドルを献金して、占領地へのユダヤ人の入植に積極的に協力してきた。^④

第四にビリー・グラハムの息子のフランクリン・グラハム伝道師は二〇〇三年四月十八日（聖金曜日）に米国防総省であった礼拝で、イスラム教を「邪教」と決め付けた。フランクリン・グラハム伝道師はイラク人の回心のための宣教運動をする。戦争を通して福音を伝える、つまり、イラク戦争支持であることを明言した。^⑤

第五に原理主義者達そして多くの福音派は終末論の中の前千年王国に固執する。前千年王国説とは千年王国の前にキリストの再臨があるという考え方である。現在の悪の世界は手の施しようがなく退廃の一途をたどる。キリストの再臨を早めるために、今、出来ることは一人でも多くの魂を救うことであると考ええる。

一九八〇年代、ロナルド・レーガン大統領を含む黙示録的な宗教思想を抱いた者たちは核兵器を伴う十字軍への熱意を表明した。レーガンとハルマゲドン思想を抱いていた彼の友人ハル・リンゼー、ジェリー・フアルウェル、パット・ロバートソンは、黙示録的な終末をもたらす道具を自らが手にしていると考え、ソ連の絶対的な悪について宣言を下していた。黙示録的な戦争の危機に応じて「憂慮する聖職者と信徒の会

(Clergy and laity concerned)」やカトリックの司教が核兵器反対キャンペーンを行ない、ついには、レーガンが千年王国思想的な右派のアメリカの有権者からの距離を置くように説得した。この反核運動は、一九八七年に締結された中距離核ミサイル削減条約を作り出すのを助けた。

現在も終末論の前千年期再臨説もアメリカで根強い。ティム・ラヘイ／ジェリー・ジェンキンズ著『レフトビハインド』は全米で六五〇万部売れている。この本の神学的立場はデイスペンション主義（天啓的歴史観）に立った千年期前再臨・患難期前携挙という終末論の立場である。この立場によれば、イエス・キリストは先ず患難期の前に真のクリスチャンを携挙するために（世人に知られず）空中に再臨し、その後、七年の患難期を経て、主はまた再臨することになる。ティム・ラヘイを始め、この立場に立つ者は、患難期の間にエルサレムにユダヤ神殿が再建され、旧約聖書の祭儀が再び行なわれることを信じている。この著者たちの運命的な終末論は、必然的にパレスチナにおけるイスラエル国家と、その為すところへの無条件の支持に繋がる。問題は非常に困難だとしても、パレスチナ人（そこにはムスリムだけでなく、多くのキリスト者の兄弟姉妹が含まれる）の声は聞かれず、無視され、その存在すら知られていない。著者の運命的な終末論は、パレスチナや世界に、イラクに更なる流血を招くことを、聖書の預言の成就として「良し」とするのである。

ティム・ラヘイはアメリカの宗教右翼のリーダーの一人である。宗教右翼の主張には相手に悪魔のレッテルを貼り付けて恐れや敵意を醸成するイデオロギーがある。この十九世紀生まれで二十世紀育ちの聖書解釈と神学が、本当に「聖書的」と言えるのか、その神学を二十一世紀の人類課題として検証すべきではないか。⁽⁴⁶⁾

もしこの説が正しいものなら、初代教会も、宗教改革者たちも、終末に関する重要な真理を知らなかった

ことになる。それ故「終末」に関して、たとえばどのような興味深い物語でも、正しい聖書解釈に基づかないのであれば、それは単なる「空想話」「作り話」新共同訳（Ⅱテモテ四・４）でしかない。神の民は「健全な教え」（Ⅱテモテ四・３）に基づいて、終末的苦難の現実を直視しなければならない。⁴⁷カーター元大統領は『「ニューヨークタイムズ」紙に投稿した記事の中で、南部バプテスト協議会（会員数一六〇〇万人、教会数四万二千）がイラク攻撃に賛成した最大の原因は、終末論に基づく協議会のイスラエルとの宗教的な利害だと断定した。⁴⁸

第六にプロミス・キーパーズの統治の神学である。子ブツシュ大統領がキリストの再臨の教理に目を開かれたのは、ビリー・グラハムの説教からである。しかしブツシュ大統領が一国の大統領として黙示録的時代の中でどう振舞うべきか、その知恵を具体的に進言したのはダラスを根拠地にした宗教右派プロミス・キーパーズの指導者トニー・エバンズである。プロミス・キーパーズというのは、アメリカの道徳復興を目的として一九九〇年に創られた保守的原理主義者の全米組織で、戦後アメリカの宗教右翼の歴史では第三波に当たる。最初の波はジェリー・ファルウエルのモラル・マジョリティ、次がパット・ロバートソンの「キリスト者連合」で、プロミス・キーパーズは父親の復権や家族の価値に力点を置いた「古き良きアメリカ」、五〇年代の家族主義の復興タイプである。さて問題はこのエバンズが、テキサス州知事時代からブツシュに「神の目でもって世界を見るよう」教えてきたということである。プロミス・キーパーズは「統治主義」(Dominionism)という特異な終末思想を持っている。これは少数の選ばれた神の民が悪の支配から地上を奪回するという教義で、ブツシュはエバンズからこれを教えられ、次第に自分を「メシア的指導者」に擬するようになったと言う。

統治主義は元々福音派に多いカルヴァン主義に、カリスマ運動が加わって出来た特殊な考え方で、それを

発展させた教義は「統治の神学」(Dominion Theology)とも「神の国の今の神学」('Kingdom Now' Theology)とも呼ばれている。これを唱えるのはごく少数の人々で、ローザス・J・ラッシュドローニー、ゲイリー・ノース、レイ・サットン、デイヴィッド・チルトン、カリスマ運動のアール・ポルクといった標準的な神学書には殆ど登場しない名ばかりである。にもかかわらずこの教義は宗教右翼のパット・ロバートソンやジェームズ・ケネディ、ジョン・ホワイットヘッド、フランキー・シェイファー、ジェリー・ファルウェルなどの、大衆的な福音主義者に払拭しえない影響を与えてきた。

統治の神学は、政治的には「キリスト教再建主義」(Christian Reconstructionism)を下支えする。キリスト教再建主義はアメリカに神権政治を実現しようとする七〇年代からの運動で、現代の道徳的腐敗からアメリカを清めて、聖書に基づいて国を「立て直す」ことを目標に掲げる。再建論者によれば、イエス・キリストが再臨される時、キリストを信ずる者には世界を統治する資格が与えられる(黙示録五・10)。そのため選ばれた者は、魂を救う伝道だけでなく、聖書の教えに従って世界を社会的にも政治的にも改造しなければならない。キリストによる世界の統治はただ祈っているだけでは実現されず、あらゆる政治手段を用いて世を改造しておかねばならない。キリストの再臨はこれらすべてのことの準備が整った時に起こるであろうと言っているのである。^④

第七に原理主義者と福音派は米国の国家宗教である市民宗教を構成する。米国大統領は国民を統合するために大統領就任式や戦没者追悼式や国家の危機に際し市民宗教を利用する。米国は建国のはじめから「政」と「教」が一致した国である。教会と国家の密接な関わりが市民宗教を作り上げることになった。しかし市民宗教の神は、国の行為を批判する神ではない。米国原理主義者と福音派の保守主義は偏狭な愛国心と結びやすく、聖戦・正戦として戦争行為を正当化しやすくする。市民宗教の神は祝福の神、祭司的な働きをする

神であり、国の行為を批判する預言者的な働きをする神ではない。

このように市民宗教にはネガティブな側面がある。ラインホルド・ニーバーはその著『アメリカ史の皮肉』の中で次のように言う。「アメリカが最も強大な敵としなければならないのは敵の国々ではなく、自らの立場を絶対とする精神的傲慢であり、アメリカの立場と神の摂理を同義と見て平然として恥じない偶像崇拜である」^⑤神の名において国家の行為を正当化するという「国家の自己偶像化」または「自己崇拜」に陥る危険が常に存在するのである。超越性を欠いた市民宗教を奉ずる大統領は、市民宗教・国家宗教の祭司として、神は常に自分たちの側に立っているという認識を、国民に与えて国家やその国民を絶対視する傾向がある。^⑤

結論

アメリカのキリスト教原理主義・福音主義の歴史とその潮流の経緯の道筋の跡をたどってきた。アメリカのキリスト教原理主義・福音派には個人の罪は強く意識しても、罪人である市民が集まって作る「国」という組織や構造に巣くう「団体の罪」、「構造上の罪」ということには大変鈍感であり、アメリカは常に正しいと信じる傾向が強い。このようなキリスト教原理主義者及び福音派の米国至上主義には、他の国の福音派教会との国境を越えた（トランスナショナルな）連帯がない。共感するものが少ないという現実がある。同じ福音主義の教理と信仰に立っているながら、教会と国家について、アメリカの原理主義及び福音派の教会は他の国の多くの福音派の教会と考え方が異なる。アメリカの原理主義の教会や福音派教会が世界の諸国の教会との連帯よりも、国家との関わりの中で自分のアイデンティティを求めている。自分たちは神の選びの民であるという選民思想は第二次世界大戦に突き進んだドイツ的キリスト者や国家神道に迎合した日本的キリスト教の姿に似ている。政教協力には危険性がある。アメリカの原理主義者や福音派はアメリカの市民宗教と深く関わっている。「国家は、その国民の統合のために、国家宗教ないし市民宗教を起こそうとする時、神の

み旨に背くものとなる」ことを覚えたい。⁵²⁾

二〇〇三年三月、米国福音同盟（NAE）はイラク戦争に賛成したが、アジア福音同盟（EFA）と日本福音同盟（JEA）はイラク戦争に反対する声明を出した。①この戦争が一般国民の生命、財産や環境を破壊することは疑い得ない。全世界の経済、政治、社会の安寧に破局的な衝撃を与え、報復の循環への引き金を引き、悪を終わらせる代わりに、悪の循環をもたらすことになる。②アジア福音同盟はすべての、特に米国の宗教者に対し、戦争に宗教的な意味づけをしないように呼びかける。それは、キリスト教徒が他の宗教信者、特にイスラム教徒と共に発展させてきた調和の関係を危うくする。この戦争は宗教的なものでも、東西文明の衝突でもない。世界の、とりわけアジアの教会は、西洋文明がキリスト教と同義であるという誤解が広まることに対して多大な犠牲を払わなければならない。教会は戦争の一方の代弁者となるべきではない。③EFAはまた、平和と世界の調和を脅かすすべてのテロや大量破壊兵器を非難する。核兵器、生物化学兵器の廃絶を求める。そして、すべての勢力が協力してこの戦争の早期終結がなされることを求めた。日本福音同盟も二〇〇三年三月十七日（開戦前）と三月二十八日（開戦後）に社会委員長の名でブッシュ大統領に對して戦争反対の声明を送った。

最後に忘れてならないのは、アメリカという国が一方に走りすぎる時、それにブレーキをかけ、バランスのとれた方向にもっていく、穏健派のキリスト者たちも、政治的指導者たちもいるということである。プロテスタント主流派教会の停滞、福音派や原理主義者の伸張する昨今の趨勢の中で、アメリカの宗教界には原理主義者とその「敵」だけではなく、中間にあって惨事（bad news）と福音（good news）の関連を真摯に模索し続ける多くの「穏健派」も多数存在するということである。かつて赤狩りのマッカーシズムが吹き荒れた時、プリンストン神学校がマッカーシズムに対して異議申し立てをしたことがあり、その勇気ある異議

申し立てによって赤狩り旋風に歯止めをかけることが出来たように、極端なこじつけの聖書解釈によって自己の立場を擁護したり、国益を追求することに躍起となっている世俗国家と自己の信仰を同一化する愛国主義的キリスト教信仰の愚かさを避ける人達もいる。

アメリカの原理主義や福音派には国境を越えた世界の諸教会との連帯がないと述べた。その考え方は前述のアジア福音同盟の声明から明らかである。これはアジアのキリスト者たちがアメリカの原理主義者や福音派に対して異なる意見を持っているというだけではなく、聖書の真理をもつて形成する世界観や戦争観がアメリカの原理主義や福音派の考え方と相容れないということでもある。本当の聖書のあり方を追求し、地に平和を非暴力によってもたらすあり方を追求していきたい。

注

- ① 藤原帰一「朝日論壇時評」(朝日新聞 二〇〇三年四月二十八日)。
- ② リチャード・V・ピラードとロバート・D・リンダー『アメリカの市民宗教と大統領』(堀内一史、犬飼孝夫、日影尚之訳 麗澤大学出版会 二〇〇三年) 六二―六三頁。
- ③ 堀内一史『分裂するアメリカ社会―その宗教と国民的結合をめぐって』(麗澤大学出版会 二〇〇五年) 一〇―一頁。
- ④ 古矢旬『アメリカ 過去と現在の間』(岩波新書九二一 岩波書店 二〇〇四年) 一九〇―一九四頁。
- ⑤ 中野毅「政教分離社会の展開とデノミネーションリズム」井門富二夫編『アメリカの宗教―多民族社会の世界観』(弘文堂一九九二年) 五八―七二頁。

- ⑥ 古矢旬、前掲書 一九五一―一九七頁。
- ⑦ 堀内一史、前掲書 二四二―二四三頁。
- ⑧ 高橋章「米南部バイブルベルトの信条と野望」(『福音と社会』二〇一号、二〇〇二年四月三十日)。
- ⑨ 佐伯啓思『新「帝国」アメリカを解剖する』(ちくま新書四一〇、筑摩書房、二〇〇三年)、一七四頁。
- ⑩ 堀内一史、前掲書、二二頁。
- ⑪ 蓮見博昭『宗教に揺れるアメリカ』(日本評論社、二〇〇二年)、五〇―五三頁。
- ⑫ George M. Marsden, *Fundamentalism and American Culture The Shaping of Twentieth-Century Evangelicalism 1870-1925* (New York: Oxford University Press, 1980) pp. 91-95.
- ⑬ Mark A. Noll, *The Scandal of the Evangelical Mind* (Grand Rapids, Michigan: Wm. Eerdmans Publishing Company, 1994) p. 101.
- ⑭ 古矢旬、前掲書 一九八頁。
- ⑮ 古屋英雄『激動するアメリカ社会―リベラルか福音派か―』(ヨルダン社、一九七八年)、八七―九〇頁。
- ⑯ ジョン・ストット著・有賀寿訳『地の塩・世の光』(すぐ書房、一九八六年)、二二頁。
- ⑰ 古矢旬、前掲書、一九九―二〇〇頁。
- ⑱ 大谷順三『進化論をめぐる科学と信仰』(すぐ書房、二〇〇一年)二〇五頁。
- ⑲ Mark A. Noll, 前掲書、p. 137.
- ⑳ アリスター・マクグラス著、島田福安訳『キリスト教の将来と福音主義』(いのちのことば社、一九九五年)三七―三八頁。
- ㉑ 古矢旬、前掲書 二〇二―二〇三頁。

- ②② 朝日新聞 二〇〇五年十二月十四日。
- ②③ 朝日新聞 二〇〇五年十二月二十二日。
- ②④ 森孝一『宗教からよむ「アメリカ」』（講談社選書メチエ：一九九六年）、二二頁。
- ②⑤ 古屋安雄、前掲書、九二頁。
- ②⑥ 古屋安雄、前掲書、九三―一〇三頁。
- ②⑦ 蓮見博昭、前掲書、八九頁。
- ②⑧ 栗林輝夫『ブッシュの「神」と「神の国」アメリカ』（日本基督教団出版局、二〇〇三年）、一六一―一七頁。
- ②⑨ 鈴木有郷『ラインホルド・ニーバーとアメリカ』（新教出版社、一九九八年）、二〇六―二〇七頁。
- ③⑩ 古矢旬、前掲書、二〇三―二〇七頁。
- ③⑪ 蓮見博昭、前掲書、一二五頁。
- ③⑫ 森孝一、前掲書、二一〇―一一頁。
- ③⑬ 蓮見博昭、前掲書、一二六―一二七頁。
- ③⑭ 「ブッシュ大統領を駆り立てる宗教右派」（『アエラ』、二〇〇三年四月十四日）、三七頁。
- ③⑮ 古矢旬、前掲書、二〇八頁。
- ③⑯ 鈴木有郷「大統領選挙に向けてキリスト教の信仰はどのような貢献ができるか」（青山学院大学宗教主任研究叢書『キリスト教と文化』二〇号、二〇〇五年）、一〇二頁。
- ③⑰ 廣部泉（名古屋大学教授）「米国、宗教右派成功による衰退」（『朝日新聞』「海外文化」、二〇〇二年一月十八日）。
- ③⑱ 『朝日新聞』、二〇〇三年五月一日。

- ③⑨ E・W・サイード著・中野真紀子訳『裏切られた民主主義―戦争とプロパガンダ四』（みすず書房、二〇〇三年）、四―五頁。
- ④⑩ E・W・サイード、前掲書、七四―七五頁。
- ④⑪ 棚村恵子「アメリカのキリスト教原理主義」（『アレティア―聖書から説教へ―』三六号、日本基督教団出版部、二〇〇二年三月）、五頁。
- ④⑫ ヴェルナー・フート著・志村恵訳『原理主義―確かさへの逃避』（新教出版社、二〇〇二年）、九七頁。
- ④⑬ ロバート・ジュウェット、ジョン・S・ローレンス著・前川裕訳「十字軍の伝統と対イラク戦争」（『福音と世界』、二〇〇三年四月）、四〇頁。
- ④⑭ 栗林輝夫、前掲書、一九―二〇頁。
- ④⑮ 高成田亨「ブッシュ氏と宗教」（『朝日新聞』、二〇〇三年四月三十日）。
- ④⑯ 後藤敏夫「『レフトビハインド』の邦訳出版について思うこと」（『神学のひろば』二号、日本福音キリスト教会連合全国神学委員会、二〇〇二年）。
- ④⑰ 岡山英夫「終末的『うめき』と祈り」（『祈りの群』、二〇〇二年六月一日）。
- ④⑱ 堀内一史、前掲書、二五三頁。
- ④⑲ 栗林輝夫、前掲書、二四―二七頁。
- ⑤⑰ 鈴木有郷、前掲書『キリスト教と文化』二〇号、九九頁。
- ⑤⑱ 堀内一史、前掲書、二八一頁。
- ⑤⑳ 『教会と国家』（JEA神学委員会パンフレット：日本福音同盟「JEA」、二〇〇四年）、五頁。